

富山薬業の始祖・前田正甫を祭る「正甫公法祭」が4月18日開催**第三百十四年忌大法要は富山薬連により運営**

発行：日本置き薬協会 事務局



富山県薬業の始祖とされる富山藩主・前田正甫(マサフ)公の遺徳を偲ぶ「二天会・正甫公法祭」が4月18日午後2時より富山市梅沢町の(株)広貫堂本社会議室で執り行われた。同法祭は正甫公が宝永三年(1706年)4月19日に逝去した翌年から300年以上にわたり正甫公の菩提寺である日蓮宗海秀山大法寺(広貫堂に隣接)でなされていたが、昨年秋に寺側から住職の高齢等を理由に継続困難として関係先に案内があった。これを受け富山県薬業連合会が主体となって同法要を継続して開催することになったもので、大法寺より草野寛行住職を招き、従前同様、歴代富山藩主と富山県薬種商の元祖・松井屋源右衛門尊儀(本年三百三年忌)、物故薬業功労者の追悼法要も併せて営まれた。

*写真は富山城跡公園内にある前田正甫公像

富山売薬の始まり(殿様商売ではない藩主のベンチャー)

(1)藩主の製品開発 富山藩(加賀藩支藩、10万石)は加賀百万石三代藩主、前田利常(利長の弟)の次男・利次を初代藩主に寛永16年(1639年)に始まる。現在の富山市の市域と重なる狭隘の土地(東西に宗家加賀藩)に神通川、常願寺川の大河川があり、繰り返されるその氾濫で米の収穫は不安定でたった事、前田藩宗家からの分藩の際、過大な家臣団を押し付けられるなど、藩財政は豊かではなかった。二代藩主・正甫公は、病弱だったこともあり薬に大変興味を



持ち、自分で薬を作っては病気の家来やその家族に与え、また改良、改善に取り組んでいた。その折、自身が腹痛を起こし、家来が所持する備前の万代常閑(マンゾウカク)処方薬「反魂丹」(ハゴンタン)を服用したところ快方に向かい、その配合と製造法を得ようと万代常閑を自藩に呼び寄せ薬種商の松井屋源右衛門が伝授し製造を命じた。

(2)藩主のマーケティング 元禄3年、江戸城中にて岩代三春藩の藩主が突然腹痛に襲われ、そこに居合わせた正甫公が懐中の印籠にあった反魂丹を渡し服用させたところ忽ち回復し。この光景を目にした諸国の藩主より正甫公へ反魂丹の流布販売が所望され、また将軍への献上品にもした。正甫公は、販売を商人、八重崎屋源六に命じ、また米作に大きく頼らない藩政を目指し「他領商売勝手」を出して各藩への反魂丹販売を領民に促した。

なお、配置販売業の江戸期から今日までの歴史的経緯と発展過程については、平成29年11月6日、(一財)



島原化学進歩会45周年記念講演会「二本の四大売薬における行商圈の構築過程とその後」東洋大学経営学部 幸田浩文教教授発表(検索可)をご覧ください。また同教授により、「明治政府の売薬観と大和売薬・富山売薬との比較を中心として」(経営力創成研究第12号掲載2016)、「田代売薬にみる行商圈構築の史的展開-江戸時代中期から現代へ」(同誌第13号掲載2017)が発表されてます。

写真は昨年催された正甫公祭